ラグビーワールドカップ2019 日本大会「埼玉県・熊谷市」開催にむけて（中）

埼玉県ラグビーの昭和史

～浦和高ラグビー部誕生から熊谷工高全国制覇まで～

ぶぎん地域経済研究所　取締役調査事業部長　**松本　博之**

ラグビーワールドカップ2019 日本大会「埼玉県・熊谷市」開催についての特集記事の中編として、埼玉県ラグビーの歴史について紹介する。本県のラグビーの歴史は、高校ラグビーの歴史と歩を一にすると言っても良いであろう。県内ラグビー関係者や多くのラグビーファンの視線は、全国高校ラグビー選手権“花園”での活躍に凝縮されてきた。そこで本稿では、「埼玉県ラグビーの昭和史」として、埼玉県ラグビーの創成期から熊谷工高の全国制覇までの高校ラグビーの歴史を振り返り、県内ラグビーの発展の歴史を紐解く。

県内ラグビーの事始め　1921（大正10）年

わが国におけるラグビーの歴史は、1899(明治32)年に始まる。慶應義塾大学の英語教師として赴任していた23歳の英国人教師、エドワード・クラークが学生達に教えたことがラグビー事始めと言われている。

さて、埼玉県のラグビーの事始めは、1921(大正10)年11月の旧制浦和高校（現埼玉大学）の創立に始まる。翌1922(大正11)年４月200名が入学し、10月12日のグランド開きで、埼玉県で最初のラグビーチームが練習を開始した。翌1923年から本格的なチーム作りを始め、帝国大学や早稲田大学のＯＢが指導にあたり、２月27日にチーム結成第１戦を旧制一高（現東京大学教養部）と行い、スコアは　一高27 対０ 浦高　だった。

その後28年間は県内ではラグビーチームが創設されることはなく、旧制浦和高校は、埼玉県内唯一のラグビーチームとして、七高リーグ戦（旧制一高、学習院、成蹊、成城、水戸高、都立高、旧制浦和高）やインターハイ等で活動をした。その間に卒業生の中で24名が東京帝国大学ラグビー部に入部し、４名が主将を務めたという記録が残っている。

終戦直後、旧制浦和中学（現浦和高校）ラグビーを体育授業に

1945（昭和20）年８月に太平洋戦争の終戦を迎えた。この混乱の中にあって終戦から１ヶ月後には、京大グランドで、旧制三高と関西ラグビー倶楽部の試合が行われている。同じ頃、埼玉県教育局から旧制浦和中学の体育担当の黒田清次に、「明治大学八幡山グランドで開催されるラグビー指導者講習会に参加するよう…」と指示があった。明治大学ラグビー部の北島忠治監督の指導の下、実技指導を受講してきた黒田教員は、学校に戻り早速体育の授業の中に取り入れた。

翌年の1946年10月には、旧制浦和高校ラグビー部に所属していたＯＢ達の勧めもあり、旧制浦和中学にラグビー部がついに創られた。ここから埼玉県高校ラグビーの歴史の１頁がはじまった。指導一切は旧制浦和高校部員によってなされた。当時は戦後のモノ不足の時代で、選手達は生地を持ち寄って濃紺に染めてユニホームを作った。以来、濃紺は浦和高校ラグビー部のチームカラーとなっている。

県内初の中学戦は旧制浦和中学対浦和商業高

1947年に浦和商業高校、旧制熊谷中学（現熊谷高校）、旧制本庄中学（現本庄高校）の三校にラグビー部が創設された。県内で始めての中学生チーム同士の試合が、48年１月29日、浦和商業グランドで旧制浦和中学と浦和商業との間で行われた。結果は６対５のスコアで旧制浦和中学の勝利となった。

1946,47年当時は、県にラグビー協会はなく、東京の関東協会に直結して試合に参加していた。しかしながら実際に“試合のできる”戦力を持っていたのは、旧制浦和中学と浦和商業高だけであったと言われている。東京地区の一部として公式戦に出場していたが、県内各校のレベルは低く東京都内のチームとは大きな力の差があった。チーム数が少ないため試合をする機会も少なく、またラグビーへの理解も低かったのである。

1948年に学制が変わり、中等学校が現在の高等学校となった。同じ年に、その後の埼玉県の高校ラグビーの牽引者となる森喜雄が熊谷商工高（現熊谷工高）にラグビー部を創設した。日体大のロックとしてラグビーを経験した森は、熊谷商工高に赴任すると体育の授業にラグビーを取り入れ、生徒達のラグビー熱が高まってくるとラグビー同好会を発足させ、ラグビー部創部へと繋げていった。

森は当時の高校ラグビーを取り巻く状況について、後に埼玉県ラグビー協会誌に次のような言葉を寄せている。「当時はラグビーと言っても、ほとんど知っている人はなく、高校生でさえも学校で体育の授業か、部活動でやっていない限りは無知に近く、競技内容など知らない生徒が多かった時代だった。」

埼玉県高校ラグビーの大会成績表（初期）

	関東大会予選		全国大会県予選		国民体育大会	
	優　勝	準優勝	優　勝	準優勝	優　勝	準優勝
1948	学徒大会で兼ねる					
49						
50			本庄高		本庄高	
51			熊谷商工	本庄高	熊谷商工	浦和商
52			熊谷商工	熊谷高	熊谷高	熊谷商工
53	熊谷高	熊谷商工	熊谷商工	熊谷高	熊谷商工	深谷商
54	熊谷高	熊谷商工	熊谷商工	熊谷高	熊谷商工	浦和高
55	熊谷高	熊谷商工	熊谷商工	熊谷高	熊谷商工	熊谷高
56	熊谷商工	浦和高	熊谷商工	熊谷高	熊谷商工	浦和高
57	浦和商	浦和高	浦和商	熊谷商工	熊谷商工	浦和高
58	浦和高	熊谷商工	熊谷商工	浦和高	浦和商	
59	浦和高	熊谷商工	浦和高	慶応志木	熊谷商工	浦和高

熊谷商工、浦和高が北関東予選を突破し全国大会出場している　　出所：埼玉県ラグビー協会誌

全国大会出場を阻む関東地区の壁

その後の県内高校ラグビー発展の中心となる浦和高、浦和商高、熊谷高、本庄高と熊谷商工高の５校によって埼玉県ラグビーフットボール協会が設立された。1948年度の春季大会、国民体育大会では浦和高が圧倒的な強さで優勝した。1949年に深谷商業高に６つ目のラグビー部が創られ、県南２校、県北４校と増加していった。

1948年度浦和高、49年度熊谷高に続き50年度は本庄高が全国大会の埼玉県予選で優勝した。年ごとに優勝チームが変り、51年度には熊谷商工高が優勝した。森喜雄が率いた熊谷商工高は、その後1966年度に商業高校と工業高校に分離されるまで、県内高校ラグビーの“王者”として君臨していく。

1951年度以降、熊谷商工高が全国大会予選に勝ち、県内では他を寄せ付けない状況であったが、51年度関東地区予選日川高校(山梨県)、52年度関東地区予選慶応高校(神奈川県)、53年度北関東地区予選高崎高校(群馬県)、54年度関東地区予選慶応高校(神奈川県)、55、56年度関東地区予選高崎高校(群馬県)に連続して破れ、全国大会の出場の扉を開くことが出来なかった。1957年度は、浦和商業高が８-３の僅差で熊谷商工高を破り県代表となるが、この年も関東地区予選の壁は厚かった。

1958年度(第38回大会)　熊谷商工高が初めての全国大会の出場

1958年度に県予選決勝で、熊谷商工高は浦和高に11対３で勝ち、この年からの地区予選（北関東地区～ 1964年まで、埼玉、群馬、新潟）で高崎高校、新潟商業を連破し、埼玉県勢として全国大会に初出場を勝ち取った。埼玉県は全国大会38回目にして初めて県代表を送り出した。本大会では、強豪の天理高(奈良県)に同点引き分け(抽選勝ち)で、２回戦に進んだ。

1959年度（第39回大会）は、浦和高が念願の初出場を果たした。当時の県内高校ラグビーは熊谷工高を筆頭に県北の高校の牙城で、浦和高は県内予選で涙を飲んでいたが、この年浦和高は春シーズンから強く、宿敵熊谷商工を倒し県代表の座をつかんだ。その後、北関東予選を突破して創部以来、初めての全国大会出場を勝ち取った。しかし、初戦で敗退している。

1962年度(第42回大会)から、大会会場は花園ラグビーに移った。高校ラグビーの聖地、花園伝説の始まりである。この年は、熊谷商工高が２度目の全国大会出場となったが、この年も初戦敗退となった。1963年度（第43回大会）は熊谷商工高が２年連続３度目の全国大会出場で、熊本工高（熊本県）を17対０で破り、埼玉県勢として、花園で記念すべき初勝利を挙げる。

商工分離で“熊谷商工高時代”終わる

1965年、この年は熊谷商工高の最後の年となった。監督の森喜雄が母校である熊谷商工高に赴任しラグビー部を創設、全国大会５回、国体５回、関東大会は第１回から13年連続して出場するなど県内で圧倒的な力を誇ってきた熊谷商工高の歴史が終わり、その伝統は多少の紆余曲折を経て熊谷工高が引き継ぐこととなる。

1966年度シーズンは、４月の熊谷商工高が商業と工業へと分離独立から始まった。商工分離のあおりを受けて熊谷商高、熊谷工高ともに戦力ダウンは何ともしがたく出遅れる。しかしながら1967年度開催予定の埼玉国体のために森喜雄（熊谷工高教諭となった）が集めた国体候補選手たちが徐々に力をつけ、全国大会予選までにはチーム体制が整い、熊谷商高と熊谷工高の決勝となった。決勝では、森が国体候補選手として集めた選手が所属していた熊谷商高が熊谷工高を破り、北関東代表決定戦に進む。しかしながら１点差で高崎工業高に負け、全国大会出場はならなかった。

話は遡るが、1965年入学の選手を“国体候補選手”として、森喜雄が熊谷商工高の商業科に集めた。翌年の商工分離後に、森本人は商業高校に勤務する予定でいたからだった。しかし、（巷間言われているところによると）熊谷商工高で野球部が甲子園に出場するようになると、分

離に際して“熊商（熊谷商高）は野球中心、ラグビーは熊工（熊谷工高）へ”と関係者の意見が傾いていったという話だ。熊谷商高へ勤務する予定でいた森は、商業科に国体候補選手を集めていたが、実際には熊谷工高での勤務となり、自ら集めた有望選手と戦うことになってしまったのである。

翌1967年（第47回大会）は、森が集めた熊谷商高の３年生となった国体候補選手の活躍で、熊谷商高が無難に県予選、北関東代表決定戦を突破し、熊谷商高として全国大会初出場となる。大会では“国体候補選手”の活躍が期待されたが、優勝チームとなった福岡電波高と１回戦で顔を合わせ、ゼロ敗を喫した。熊谷商高としては、最初で最後の花園出場となった。

新興勢力の台頭、熊谷工高でまさかの部員不足

1968年度(第48回大会)は、前年に埼玉国体が終わり、熊谷商工高の分離３年目となり、各校の戦力の均等化が進んだ年でもあった。埼玉国体の教員ラグビーチーム選手として赴任してきた山中により指導を受けた朝霞高がメキメキと力をつけた年となった。これまでの強豪校の間を割って、朝霞高が初陣として全国大会へ出場した。県予選決勝でも熊谷工高を14- ３と快勝し、北関東予選での群馬県代表の農大二高を下し、初出場となるも初戦敗退で涙を呑んだ。この年は埼玉国体の影響もあり、県内の高校ラグビー部の数はの前年の９校から一気に13校まで膨らんだ。

1969年度の話題としては、県下最高のラグビーの名門校である熊谷工高が部員不足に陥ったことであろう。熊谷工高では、埼玉国体での必勝を目指して猛烈な練習を行い、その評判のためラグビー部の入部希望者が激減して、公式戦にも野球部に助っ人２名をお願いする状況となってしまったのである。しかしながら、野球部の夏の大会終了後、助っ人２名が本格的にラグビーの練習に本腰を入れるようになると、そこはもともと地力のあるチーム、秋以降にチーム力も急上昇していった。県予選の準決勝では夏まで歯が立たなかった熊谷商高を倒し、決勝では前年度優勝の朝霞高を倒し、全国大会へと駒を進めた。熊谷工高として初めての全国大会であった。

1970（第50回大会）、71年度（第51回大会）は、朝霞高が２年連続の出場、翌72年度は行田工高が初出場と熊谷工高（前熊谷商工高）以外の高校が３年連続で県代表として全国大会へ出場となった。第50回記念大会として一県一校出場となった1970年度の県予選は、珍しい顔ぶれが勝ち進んでいった。ベスト４の顔ぶれを見ると、朝霞高－熊谷高、秩父高－立教高という異色の高校が進出してきた。この年２回目の出場となった朝霞高は、花園で悲願の１勝を挙げた。この年の主力がほとんど残った朝霞高は翌年度も強く、新人戦、関東大会予選、国体予選などすべてを制覇して全国大会へ２年連続で駒を進めた。また70年度は、埼玉県高校ラグビーの創成期を牽引した本庄高が廃部となった年でもある。

飛躍の1980年代

1978年度（第58回大会）は、熊谷工高が３年連続で11回目の出場となった。1958年度（第38回大会）以来、埼玉県代表は、17大会に出場しているが、それまで２回戦以上に進んだことがなかった。初戦敗退が11回、２回戦敗退が６回で、通算戦績は、５勝１分17敗と低迷していた。しかし、この年は熊谷工高が県勢として初めてベスト８まで進出、この年を契機として1980年代の健闘、1990年度（第70回）の優勝へと繋がっていく。

1981年度（第61回大会）は、熊谷工高が熊谷商工時代から数えて14回目の出場でついにベスト４の壁を破った。１回戦で奈良の強豪天理高に22- ６で快勝すると、２回戦、準々決勝を突破し、初の準決勝は古豪秋田工高と対峙した。結果は大接戦の末、10- ９の１点差の惜敗となった。しかしながら78年度（第58回大会）でのベスト８を超える好成績によって、全国高校ラグビー界で熊谷工高の知名度が大いに高まるとともに、全国の上位のレベルでも戦えるチーム力をつけてきた埼玉県代表の新たな段階へと進んでいった。

その後も、熊谷工高の戦力は充実していった。翌年は行田工高に敗れが、1983年度（第63回大会）から88年度（第68回大会）まで６年連続で花園の土を踏む。

堀越の奮闘！熊谷工高、埼玉県勢として初の決勝進出

熊谷工高は､1984年度（64回大会）､翌85年度（65回大会）と２年連続してベスト４に輝く。1984年度は、その後に、日本ラグビー史上最高のスクラムハーフと言われた堀越正巳（早大－神戸製鋼、現立正大学ラグビー部監督）が１年生で入部してきた年でもある。堀越を中心としたチーム作り、定年退職を目前にした森監督の執念が実を結んだのが、堀越３年主将で臨んだ1986年度（66回大会）だった。熊谷工高がついに花園での決勝進出となったのである。

この年度は、先述のように埼玉県高校ラグビーの育ての親で、埼玉県ラグビー協会副会長の森喜雄の熊谷工高で指揮する最後の年であった。熊谷工高は平均体重73キロと小型フォワードながらスクラムハーフの堀口正巳を中心にバックスの展開力に富んだチーム作りが奏功してトーナメントを勝ち進んだ。決勝は東京の強豪である國學院久我山だった。だがここで熊谷工高に不運が襲う。主将でありチームの司令塔だった堀越が風邪による39℃を超える発熱、無理を承知で強行出場するが、動けず前半でベンチへ下がった。司令塔を失った熊谷工高はフォワード戦での劣勢は免れず敗戦。悲願の初優勝には届かなかった｡｢日本で二番目だ、胸を張れ｣と森監督は選手を讃えたという。

森喜雄がついに熊谷工高監督を離れた。1948年前身の熊谷商工高ラグビー部創設以来、38年間ラグビー部を率いてきたが、定年退職となったのである。埼玉県のラグビー発展に尽力し、熊谷工高ラグビー部の名を全国に広めた功績は大きい。森の実績としては、全国大会準優勝１回、３位３回、ベストエイト１回、国体優勝１回、準優勝２回と県ラグビー史上に燦然と輝くものとなっている。

1990年度（第70回大会）熊谷工高が県勢初のチャンピオン

埼玉県は、昭和時代には高校ラグビーのチャンピオンを輩出することはできなかった。

時代は変わり平成の世、1990（平成２）年12月27日に開幕した第70回大会は史上最多の54校が出場した。第70回の記念大会ということで、埼玉県は２校の出場権を得ていた。Aブロック、Bブロックに分かれた予選は、Aブロックからは第一シードの熊谷工高、Bブロックからも同じく第一シードの行田工高が、それぞれ出場権を得た。

熊谷工高は、主将のスタンドオフ新井を中心に攻守のバランスが取れた好チームとして前評判は高かったが、同大会の注目は、日本代表候補５人を擁した天理高（奈良）の２連覇だった。トーナメントを順調に勝ち上がった熊谷工高は準決勝で強豪大阪工大高を16-10の接戦で凌いで66回大会以来の決勝戦進出となった。相手は予想通り２連覇を目指す天理高と激突した。熊谷工高は、ゴール前のモールラッシュ、出足鋭いディフェンスのタックルで天理高の持ち味を

消し、ゲームを自分のモノにしていった。前半を10- 6で折り返し、後半開始早々にもトライをあげてリードを広げた。結果は19- 9と、天理高をノートライに抑え込む完勝だった。熊谷工高が出場21回目（熊谷商工高時代から）でつかんだ栄光は、埼玉県勢が初の高校ラグビーチャンピオンとなった瞬間でもあった。

指揮した塚田監督の胴上げに続いて、宙に舞ったのは熊谷工高ラグビーの生みの親、埼玉県高校ラグビーの育ての親である森喜雄（当時埼工大深谷高監督）だった。埼工大深谷高は埼玉県予選の決勝で熊谷工高に敗れていた。森は「熊谷工高だけの栄光ではない。埼玉県としても初の快挙」と目を潤ませた。また「熊谷工高ラグビーは私の命そのものです。」と夢に見た瞬間を心から喜んだ。

埼玉県勢の全国ラグビー選手権大会での成績

校　　名	出場回数	全国大会成績	参　考
熊谷工高（含む熊谷商工高）	23回	31勝22敗	優勝１回、準優勝１回
正智深谷高（含む埼工大深谷高）	13回	22勝13敗	準優勝１回
深谷高	９回	12勝９敗	
行田工高	７回	４勝７敗	
朝霞高	３回	２勝３敗	
浦和高	２回	０勝２敗	
熊谷商高	１回	０勝１敗	
県勢合計	58回	71勝57敗	

注：1990年度（第70回大会）、2010年（第90回大会）は記念大会として２校出場している。
出所：新聞、ラグビー関係雑誌等より当研究所作成

待ち遠しい県勢２回目の優勝

1992年度（第71回大会）は、森喜雄監督率いる埼工大深谷高が初出場を果たす。その後行田工高－埼工大深谷高－熊谷工高の３強時代が続く。1997年度（第77回大会）からその後は埼工大深谷高（後の正智深谷高）が留学生パワーもあり８年連続で県代表の座を射止めた。1999年（79回大会）では、熊谷工高以来の決勝進出を果たすが、東海大仰星高（大阪府）の軍門に下る。

その間、徐々に力をつけてきた正智深谷高と同じ深谷市内の県立深谷高が2005年度（第85回大会）で初出場となった。その後は正智深谷高と深谷高の死闘が毎年繰り返される。2010年度（90回大会）以降３年連続で深谷高が花園に行き、2014年以降も最近まで３年連続で合計９回出場している。そんな中で2013年度は浦和高が54年ぶり２回目の出場となり、県高校ラグビーに新たな風を送るとともに、古豪復活の狼煙を上げたことが大きな話題となったことは、記憶に新しいところだ。

さて、熊谷工高が全国制覇をしたのが第70回大会、次回は2017年度は第97回大会が行われことになる。この間、埼玉県勢は決勝進出が１回、優勝はゼロである。高校野球においては、2017年、花咲徳栄高が高校野球選手権第99回大会目で、埼玉県勢として初めてチャンピオンとなった。ラグビーも100回大会前に、もう一度埼玉県勢の優勝旗を抱く姿を見たいと思うのは筆者だけではないだろう。